

第22回定期総会を終えて

白門経友会



毎年六月初旬に開催してきている白門経友会定期総会は今年で二十二回目となり、六月二日(土)に次のようなプログラムで実施し、滞りなく了承されました。

一、日 時

平成二十四年六月二日(土)

午後二時開会

二、場 所

中央大学多摩キャンパス

七号館 七一〇三教室

三、プログラム

(1) 定期総会 十四時～

十四時三十分

①平成二十三年度事業報告・決算報告

②平成二十四年度事業計画・予算案

③その他

引き続き、講演会として、「日本の農業とTPP」を演題に経済学部の大須眞二教授にお話をしていただきました。時宜に合ったテーマで、分かりやすくTPPの経緯と現状について解説いただき農業分野を中心に今後の課題等問題意識を深められる内容でした。また詳細な配布資料もご用意いただき大変有益な講演会となりました。

講演会となりました。

講演会の後は、会場を生協二階の一フットコートに移し懇親会を主催しました。参加者として、蘇州からお越しになった三木氏をはじめ三宅野氏などの大先輩から現役の教員、そしてゼミ学生など二十数名で、自己紹介等をおこない意義のある懇談の場とすることができました。

なお、定期総会の後の七月の幹事会では、今後より多くの会員を確保することや総会以外でも学生を含めた交流の場を設けることなどが課題としてあげられ、検討を進めているところです。会員各位におかれましては今後も会合等へのご参加とともに一層のご協力をお願いする次第です。

最後に、本会の運営につきましては、谷 聖子経済学部事務長の献身的な協力により進められておりここに厚く感謝申し上げます。

文 常任幹事 佐藤文博



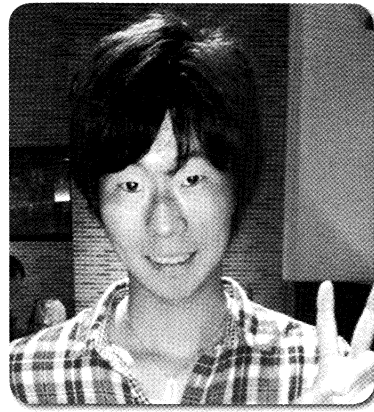
福井千春先生
を偲んで

経済学部准教授
鳥居 鉦太郎

午前8時某分、まだ静まり返っている2号館10階ではコーヒー豆を挽く音が朝を告げ、その研究室の一日が始まります。そう、福井研究室のスタートは、ほのかに香るコーヒーが開始の合図ともいえました。そんなリズムもいつからか途切れ、どうしたのかと気をもんでいた矢先のことでした。福井千春先生に初めてお会いしたのは情報環境研究会に参加させていただいた1997年と、ずいぶん前になります。同年のICT産業調査では、先生の印象がとて強かったことを覚えています。訪問先のパソコンデバイス工場でのこと、半導体チップの組み込み過程を見学し、製品の構造と性能にとても感心されました。ご専門とはかけ離れた分野なのにといいことで驚いた訳ですが、教育への情報活用も積極的に試みられていた先生には、当然の探究だったのだと思います。その後何度も一緒にさせていただいた調査活動を通して先生の姿勢に啓発され、私自身を引き締めてきたことは言うまでもありません。福井先生、これまでのご指導、本当にありがとうございました。そして、先生の入れたてコーヒーを一度でもご馳走になりましたかったです。どうぞ安らかに眠ってください。

キャリアデザインを通して 学んだこと

経済学部三年 加藤 翔



私は今3年生で、ちょうど進路選択を迫られている時期にあります。この時期になってこんなことを言うのも恥ずかしいですが、正直私は未だに将来自分がどんな業種に進みたいのか、どんな仕事をしたいのかが定まっていません。そんな3年の前期に私はこのキャリアデザインの授業を受け、思ったことが多数あります。

まず一つは、講師の方々の多くがおっしゃられていた、失敗を恐れずに何事にも挑戦するべきだということ。大学生活というものは、人生の中できわめて自由がきく最後のチャンスだと私は思います。

そんな時期だからこそ、今はたくさんすることに挑戦し、失敗し、多くの経験を積むべきなのだなど強く感じました。

実際に今までの私は、正直挑戦というほどのことは大学生活の中で行っておらず、比較的平凡な生活をしてきました。今思えば、このことにもっと早い段階で気づけていたら、本当に多くの経験をできたのではないかと少し後悔している面もあります。ただ、私の大学生はまだまだ半分近く残っているのです。これから今までの分を取り返すほどいろいろのことを体験していきたいと思えます。

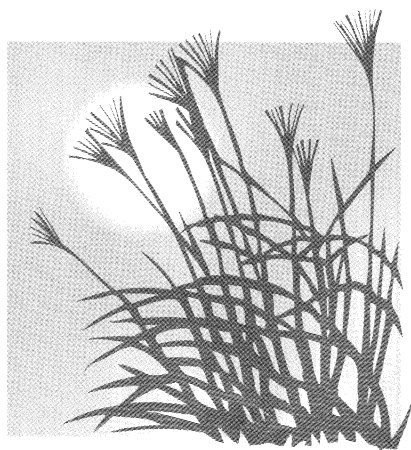
次に、私が最も印象に残った講義があります。それは志茂田景樹さんの講義です。志茂田さんは、服装や髪形といったファッションのことでだけでなく、生き方も自分の信念を貫いている、本当に自らのものを持っている方だと思います。そして講義でもおっしゃっていましたが、自分の進路、考えに妥協を

してはいけないというのは今でも強く心に残っています。就活というのは人生においてほんのわずかな時間ではあります。自分の人生を決める一つの大きなポイントになります。そこで妥協することなく、自分の思ったことを全力でやり通すことが、キャリアデザインで講義をしてくださった志茂田さんへの恩返しだと思います。

そして、私が最も驚いたことの一つは、講義をしてくださった多くの方々が転職を経験しているということです。上述したように、就活が人生の中で大きなポイントになることは間違いないと思います。しかし、それは人生のすべてではないのです。働き出してからやり直しはきくということも、このキャリアデザインで学ばせていただきました。自分に本当にあった仕事があるものはないか、いつ分かるかもわかりません。それでも、本当の自分の“天職”を探すためにこの残された大学生活を送っていきたくと思います。

本音を言うと、この授業を1年生でとっていたら私の大学生活も変わっていたかもしれないと考えると多くの後悔があります。ただ、3年生の今だからこそより強く心に響いたのだとも感じました。最後になりましたが、これだけ様々な

業種・業界に進まれた多くの先輩方から直接講義をしていただけるのは、長い歴史と伝統のある中央大学だからこそだと思います。本当にこのキャリアデザインには感謝したいと思います。



キャリアデザインを通して 学んだこと

経済学部三年 小西 淳美



キャリアデザインの授業についてこの授業を通して学び取った事柄を印象的であった講師の話から述べる。

この授業を通して多面的な職業、豊富なキャリアを持つた皆さんの講師の方々から貴重なお話を聞くことができた。その中でも印象的であった講師の一人は、株式会社レイフルに勤める高田圭吾先生だ。高田先生からは就職・仕事・人生について学んだ。就職活動や仕事を通して気づいたキャリアについて多くを教わった。例えば①キャリアは直線的に作れるものではない②キャリアは偶然に作られる側面を持つ③仕事をする中でや

りたいことが見えてくる。自分の弱みにこだわらない。④「面白そう」と感じられる仕事を選ぶ⑤どの会社に入っても学ぶことが出来る。である。また企業が欲しい人材についても学び得た。同時にこれは、人間との関係から切り離せない我々の社会には必要な能力なのではないかと思った。仕事の知識・仕事のすすめ方・会社、社会の仕組み、それに相手の気持ちを察知しそれに応える力・コミュニケーション能力・臨機応変さを意味したものである。他の講師からも多くの事柄を学び得た。金融コンサルティングを職業とする講師の方からは、自己分析をするな・自分探しをするな。ということであったがこれは私にとって少し驚きだった。自己分析は就職活動の過程で不可欠であると思っていたからだ。仮に他者によって半強制的に自己分析をしたとしても、自分がどのような人物で他人と何が違う何を求め何故生き働くのかをすべて知ることが不可能であろうから納得のいくお言葉だっ

た。

総括して多くの講師からお話を聞いたことにより、職業観が育成され、自己の興味や適正を認識することができ、自己発見とともに他者に共感する能力を養うことができた。また起業家精神や国際的視点について学ぶことができた。

この講義に参加していただいた講師の方々から学び得たことに共通していることは「努力なしに成果は得られない」と「前向きな気持ちの持ち方」だ。自分の人生において、自分の力を100%發揮して可能な限り実践し努力する前向きな気持ちを得た。私は努力とは主体的、目的的になされるとみなしている。この講義を受ける以前の私もそうであったが、多くの人々の目には世の中の人はずいぶんと身を削って働いているような印象を受けているはずだ。私はこれから進路設計をしていく必要がある、それは就職活動を今年の冬に迎えた今、人生の一種「土台」のようなものを築き始めることを意味するのではないかと思う。多くの不安を抱える中でも、企業研究、自己の興味・適正の認識や職業の視野拡大への努力を怠らないように働きかけてくれた。学び取った概念を「努力する」という目に見えない形で、長い目で見て人生を豊かにするための人生設計に活かされ

ることを期待している。またその努力とは語学の勉強や協調・コミュニケーションを座学や実践で学ぶ事が具体的に言葉、目に見えないものでも学習しようとする姿勢や考え続ける思考を止めることはしてはいけないだろうとこの授業を通して思った。



え、あの先生が！シリーズ①

地球科学に魅せられて

経済学部 教授 中野 智子



経済学部にて二〇〇九年四月に着任いたしました中野智子と申します。経済学部の専任教員ではありますが、理学部の出身で、現在は「地球科学」、「環境科学」などの講義を担当しています。大学院生のころから、地球の気候変動に興味があり、特に温室効果気体と呼ばれる二酸化炭素やメタンガスの自然の中の動態を研究対象としてきました。

湿地や草原など自然の生態系の中で、メタンガスや二酸化炭素がどの様に吸収・放出されているのかを実際に野外で測定する」というスタイルで研究を続け、これまでロシアや中国、モンゴルで調査を行ってきました。ここではロシアでの調査の様子を紹介させていただきます。一九九二年、当時、大学院生だった私は、初めての海外調査に参加しました。行先はロシアのシベリアでした。一九九一年にソ連が崩壊してロシアになり、外国人研究者に門戸が開かれたばかりの時期でした。シベリアの中でも北極に近いツンドラ地域で、地表面から発生するメタンガスの量を測定する、というのが調査の目的でした。

ツンドラというと凍てついた大地を想像しますよね。実際、地中には夏でも融けない永久凍土が存在し、土を五〇センチも掘ると、地下水が顔を出します。ところが、夏には地表付近の土壌が融解するため、表面は湿性の草本群落に覆われ、釧路湿原や尾瀬ヶ原のように青々と風に揺れる湿地草原の風景が広がっているのです。小さな可憐な花もたくさん咲いており、その美しさに自然そのものの素晴らしさを感じたものでした。また、永久凍土地帯に特有の、表面が網目状になった地形（構造土）や中心に氷の核を持つ小山状の地形（ピング）も随所に見られ、日本とは全く違った景観に、世界は広いのだなと強く心を動かされました。

一方で、心底大変、という目にもずいぶん遭いました。湿地帯で作業するときの一番の困難は、蚊の襲来でした。人の周りに黒いベールのごとく蚊がたかり、洋服の上からでも容赦なく刺してくるのです。日本製の虫よけスプレーなども全く役にたちません。野外で作業するときには、必ず蚊よけのネットを頭にかぶり、ナイロンの雨具を上下とも身につけ、汗で蒸れるのを必死でこらえながら頑張ったものでした。

調査以外にも、ロシアで行動していた時には、びっくりするような経験をいくつもしました。今も強烈に覚えているのは、空港のトイレ（個室）にドアがついていなかったことです。床には楕円形の穴が開いているだけ。さあ、どうしたものかと悩みましたが、しかたがないので、周りの人と同じように、後ろに並んでいる人の顔をじっと見ながら、用を足したのでした。数名のロシア人研究者と一緒に調査を行いました。みなさん、とても気のいい人たちで、調査の際には大変助けられました。しかし、当時のロシア人のそうした人の良さは知人に対してはひどく冷たい態度で接するのです。例えば、レストランのウェイトレスなどは、サービスという言葉とは全く無縁で、にこりとを両替するために二時間並び、その挙句に昼休みになったからと目の前でカウンターを閉じられてしまったこともありました。研究機材を通関させるのに、空港の係官に一〇〇ドル札を握らせたこともあり、日本ではあり得ない経験をいろいろする

とができました。おかげで精神的にかなり強くなり、タフな人間に成長できたと思っています。こんな私ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

肌を感じる空気も朝晩は寒く感じるようになりましたね。

数年前から経友会へ学生の参加が多くなり、会の雰囲気も大分和やかになりました。

学生達との懇談は自分の子供との会話とは違い、たわいの無い事ですが世代間の理解が深まるものだなと感じます。

後輩達との交流は次世代へのメッセージを伝える事と同時に自身のリフレッシュにもなります。

2012年 11月 1日 第49号

発行 白門経友会常任幹事会

発行人 白門経友会編集委員長

鈴木 秀 男

〒192-0355 八王子市堀之内817番地

鈴木 様 方

TEL 042 (676) 8266 (代)

FAX 042 (674) 8668

E-mail: dome88@themis.ocn.ne.jp

郵便振込口座 00180-7-753686